ARC所蔵「(仮称)京洛月次風俗図巻」の位置
付、詞書の翻刻

川嶋　將生（立命館大学名誉教授）
E-mail　kawashima.masao@hotmail.co.jp

要旨

本図巻は1月から12月にわたる京洛の行事を、詞書と挿絵で描き表したもので、2巻から成る。ただし外題・内題ともになく、標題は仮題となっており、詞書の筆者、絵の作者などに関する情報も記されていない。しかし筆跡や絵様などから17世紀後半の制作になるものと推察される。実は本図巻と同様の内容をもつ図巻は他でも幾つか報告されており、本稿ではそれらと比較しながら、ARC所蔵本がもつ位置と意義を考察する。詞書の翻刻を付す。

abstract

These two volumes of handscrolls with illustrations and *kotobagaki* (texts) depict people's pleasures and pastimes in the city of Kyoto, associated with every month of the year. The work is untitled and thus a tentative title is given. The calligrapher and the painter are also unknown, but the brush strokes and the painting style suggest the scrolls were completed in the latter half of the seventeenth century. A few other illustrated handscrolls with similar subjects are known to exist. This paper will discuss historical and art historical significance of the scrolls by comparing and contrasting them with these similar examples. The appendix includes republication of *kotobagaki*.

はじめに

ここに紹介する「(仮称)京洛月次風俗図巻」は、立命館大学アート・リサーチセンター（略称ＡＲＣ）に所蔵される作品である。上・下二巻から成るが、いずれの巻にも外題・内題ともにない。したがって「京洛月次風俗図巻」は仮の名称ということになる。(1)

上巻には前書のあと、一月から六月までの月ごとの詞書とそれに関連する挿絵を収め、下巻には七月から一二月までの詞書と挿絵を収める。以下に書誌を記すと、上・下巻ともに、本紙は厚手鳥子紙を用い、とりわけ墨書詞書部分には、金彩草花下絵が施され、挿絵部分の天地には、金の切り箔が散らされる。上巻は巻子の最初と最後に貼られた軸紙を含めると二二紙、紙の大きさはタテがおよそ三二・二センチ、ヨコが最小で二三・三センチから最大九〇センチと、各紙によりかなりの幅があるが、全紙の合計が約八八九センチを計る。それに対して下巻は、同じく軸紙を含めると二一紙、紙の大きさはタテが三二・二センチ、ヨコが上巻と同じく、最小が二二・七センチから最大九二・四センチと幅があるが、

全紙の合計がおよそ八六五センチとなっている。

上・下巻ともに奥書はなく、詞書の筆者や画家などの名前を知ることができない。したがって制作年代の特定も難しく、現段階では筆跡や絵から判断して一七世紀後半頃の作品と考えられるが、それについてはのちに述べることにし、本稿の目的は、この「(仮称)京洛月次風俗図巻」の位置づけを試みることにある。

一　京洛の月次図の流れ

さて、洛中洛外を対象とし月次の祭礼や風俗を描くことは、周知のように一五世紀半ばに原本が描かれたとされる「月次祭礼図模本」(東京国立博物館)を嚆矢として、数多くある。というよりも、月次絵は日本における伝統的な画題であろう。そしてそれは原本が院政期に制作された「年中行事絵巻」を除くと、少なくとも近世を迎えるまでは、図帖などもあるものの、多くは屏風仕立てとなっており、代表的な作品として「月次祭礼図模本」、あるいは初期洛中洛外図屏風群、「月次風俗図」(東京国立博物館)・光円寺所蔵「月次風俗図扇面流し図屏風」などをあげることには、大きな異論はあるまい。(2)

織豊期以降になると、「十二カ月風俗図帖」(山口蓬春記念館)・「十二カ月都風俗絵巻」(三時知恩寺)・「十二カ月絵草紙」(サントリー美術館)などをはじめとする、多くの作品群が作られるようになるが、その場合、巻子・図帖様の形式でもって作られることが多くなる。ただし後期洛中洛外図屏風(第二次定型)はもちろんのこと、職人絵などにも屏風形式のものがみられることは、周知のことである。(3)

こうした流れについて藤井裕之氏は、東京国立博物館本「洛中洛外図屏風」(舟木本)に代表されるように、それまで世相に強い関心をもって描かれていた風俗画が、寛永期には終焉を迎えると指摘する。そして「元和偃武を迎え、徳川幕府の文治政策への転換を機に再び月次景物を主題化するようになり、洛中を主たる舞台に十二か月の諸行事や歳時を配する景物に注目した洛中月次景物画が現れる」という。(4)

本稿で紹介する「(仮称)京洛月次風俗図巻」(以下、ＡＲＣ本と略称する)が、一七世紀後半の作品であることが認められるとすると、本図巻は絵画の世界が世相から歳時へと関心が移っていった、まさにそのころの作品ということになる。

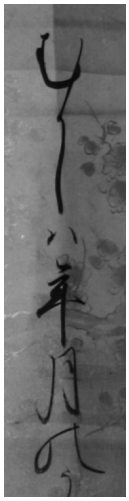
ただ近世になって現れたこうした巻子様の月次図は、絵だけであって詞書を伴わないことが多い。それに対して、ＡＲＣ本は、詞書と挿絵が対になって作成されたもので、いわばかつて中世に制作された絵巻物や奈良絵本の形式のものなのである。つまり絵巻としての形式こそ中世の有り様を踏襲したものだが、取り上げている題材が月次の祭礼や風俗、つまり年中行事であること、それを屏風ではなく巻子様に描き、さらに詞書を付していること、そしてここが重要なことだが、そうした形式の巻子を一七世紀の後半に制作していること、ここにこそ本図巻の大きな特徴があるといってよかろう。

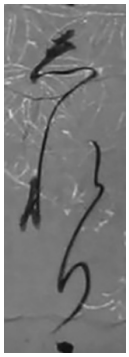
二　詞書の筆者

では「(仮称)京洛月次風俗図巻」は、ＡＲＣ本が孤本で、他にはみることができないものなのだろうか。実は作品の名称は所蔵者によってそれぞれ異なるが、本図巻ときわめて類似する巻物が、他にも何点か各所に所蔵されていることは、すでに指摘されていることである。

事例が紹介された順番から記述すると、一九九三年刊の『おもしろの花の京―洛中洛外図の時代』に掲載された「十二ケ月風俗図巻」（個人蔵）をはじめとして[5]、以下、アイルランドのチェスタービーティ・ライブラリーに「十二月遊び絵巻」が所蔵されていることが、榊原悟氏ほかによって紹介されており、また同ライブラリーには、これとは別系統の二巻本と白描の「月次景物図巻」が所蔵されていることが述べられている。次いで慶應義塾図書館にも「十二月」と命名された絵巻が所蔵されており（以下、慶應本と称す）、これは石川透氏によって翻刻・紹介されている。ちなみに石川氏ご自身は挿絵を欠いた「十二月物語」を架蔵されているとのことである。このほか、大阪青山短期大学「月次のことぶき」、国立国会図書館に「十二月遊ひ」が所蔵され、また佛教大学にも、「十二月（つき）あそひ」の名称のものが所蔵されている[6]。

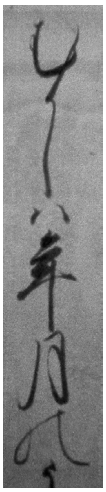
そしてこれらのうち、慶應本は同大学の「奈良絵本データベース」上で、また佛教大学本も佛教大学図書館「貴重書画像データベース」で、さらには国会図書館本も「デジタル化資料」中の「古典籍資料」で閲覧することができる。ただし題名は、先にも触れたようにすべてにおいて一様ではないし、巻物の構成も各巻異なる。しかしながら、御家流あるいは青蓮院流で流麗に書かれた詞書きの筆跡は、いずれの所蔵本も非常に類似したものなのである。



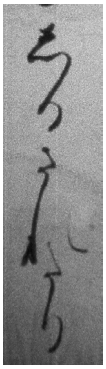


ここにすべての事例をあげることはできないため、筆跡の特徴がよく表れている三例のみをＡＲＣ本に従って例示するが、右に掲げたやや押しつぶされたように書かれた「年」字には、その特徴がよく表れており、また「月」字は、右上がりに書かれ、また跳ねにも特徴がみられる。さらには三番目の「しれり」の「し」字も、この筆者特有の書体である。こうした書体の特徴は、他の慶應本・国会図書館本・大阪青山短期大学本・佛教大学本など、いずれの諸本ともに共通するものである[7]。つまり、詞書は諸本、同一人物によって書かれたものと判断して良い。ではその人物とは果たして誰なのか。最初にも記したように、本図巻にも、またいずれの諸本にも筆者が判明するデータは記されてはいないようである。

慶應本、「一月」「二月」部分



国会図書館本、「序」の部分



佛教大学本「序」の部分

しかし、慶應本は朝倉重賢なる人物の筆と推測されており、ＡＲＣ本の筆跡は慶應本と同一であるとすると、ＡＲＣ本詞書の筆者もまた、朝倉重賢ということになる。

朝倉重賢については、近年では石川透氏の考察がある。詳細は石川氏の論考を参照していただくとして、結論だけを述べれば、重賢の事歴など人物そのものについての詳細はまだまだ不明だが、奈良絵本の筆者と

して、草紙屋城殿と関係をもっていたと推測され、一七世紀後半に活躍したという。[8]

三　詞書の二つの系統

では、諸本同一筆者による詞書であれば、それらはいずれも同一の内容が記されたものなのだろうか。諸本を比較してみると、それは二系統に大別される。

仮に一つをARC本系統とし、いま一つを慶應本系統とすると、ARC本系統は前書きがあってから一月の詞書がはじまるのに対し、慶應本系統は、前書きを欠いて直ぐに一月の詞書からはじまると同時に、詞書の内容も大いに異なる。ARC本の詞書については後掲の翻刻を参照していただくとして、慶應本の一月項の詞書は、次のようである。

そも〳〵、正月に、門松をたて申事は、むかし、そさのをのみこと、なんかいへ、つねにかよひ給ひしとき、日暮しかは、こたんしやうらいか家に、いたり給ひて、宿をからせたまへとも、かしたてまつらさるゆへに、そのおとうと、そみんしやうらいかもとへ、いたりて、やとをめし給へは、すなはち、宿をかしたてまつりぬ。それより、年のはしめに、人のかとに、松をたつるといへり。[9]

以下、各月ともARC本系統と慶應本系統の内容が異なるが、ARC本系統に属するのは、先に示した所蔵者別では、国会図書館本・大阪青山短期大学本・佛教大学本などである。これらの系統分類については、今後さらなる精査が必要となってこよう。

ただし細かくみていくと、同一系統に属するのものであっても、それらはすべて同一の体裁・内容をもつものであるということではない。ここではARC本と佛教大学本との比較のみをあげておこう。

ARC本については既述しているので佛教大学本のみをとりあげれば、上巻は、まず挿絵があり、その後にその月の詞書がくる形式をとっており（下巻は詞書が先にあり、その後に絵がくる順序）、この点がARC本との形式上のもっとも大きな相違点である。また挿絵は、顔の表現などが異なり、ARC本とは明らかに別の作者とみられるが、この点については、さらに厳密な比較が必要だろう。[10]

詞書の内容は、漢字の部分が平仮名であったりすることのほか、ごくわずかな表現の違いや文章の相違などがあるものの、ARC本・佛教大学本、いずれも大意はほとんど異なるところはない。その異同を対照するため、一例として上巻の詞書の、冒頭部分と二月の部分を引用してみよう（読点は引用者による。また／は改行を示す）。

（ARC本）
むかしハ年月のうつる時節をしらす、草／のかれ行て二たひあをくさかふるを、／是を一年と名つけ、もし人そのとし／いくはくそととへは、我はいく草の青く／なりしをみたりとこたふ、

（佛教大学本）
むかしハ年月のうつる時節をしら／す、草のかれ行て二たひあをくさ／かふるを、是を一年と名つけ、もし／人其としいくはくそととへハ、我ハ／いく草のあをくなりしを見た／とりこたふ、

波線部分が両本における異同部分だが、意味において差異のないこと

は、すぐさま看取できよう。さらに二月の詞書においても

（ＡＲＣ本）
天ちくのくしな国はつたいかのほとり／しやらさうしゆのもとに、八万の大衆、／十六のらかん、天人龍神五十二るい／ほしのことくつらなりて、ほとけのね／はんをかなしミけん、その有さまを／絵にあらハしてねはんさうといふ／といふ／ならし

（佛教大学本）
天ちくの狗尸那／国はつたいかのほとりしやらさう／しゆのもとに、八万の大衆、十六の大／からん、天人りうしん五十二るい星／のことくつらなりて、仏のねはんを／かなしミけん、其さまをゑにあら／はしてねはんさうといふならし、

などであり、両本においては、意味において大きな差異は認められないのである。

これに対して挿絵は、月ごとの取り扱う画題が、正月風景、花見風景・祇園祭礼などと同じであったとしても、そこに描かれる絵の内容に諸本同じものはない。こうした違いは各月すべてにおいてみられるが、ここでは紙幅の関係で各月すべての検討ができないため、ＡＲＣ本の正月の挿絵の特徴のみを指摘するにとどめる。

ＡＲＣ本の正月の風景には、子どもの遊戯である振り振りや、祝福芸能者千秋万歳は登場するが、佛教大学本には、それは描かれてはいない。逆に、佛教大学本や国会図書館本には描かれている、新年に祝語を唱えて門付けした「敲きの与次郎」とみられる人物は、ＡＲＣ本には登場しないといった具合である。

しかしＡＲＣ本の正月風景を何よりも特徴づけているのは、民家の道路に面した窓の飾り付けであろう（図参照）。この飾り付けは、造り物として室内に飾られたものか、または簾状のものに描かれた絵画であるのか、挿絵から判断するのはむずかしいが、これは果たして何を表現したものなのか。正月の飾りとしては、他の風俗画でもあまり見うけられないものだが、松の木の下で鶴を脇に従えた一人の老人と、その老人に何かを差し出そうとする唐子が描かれ、簾の前には注連縄が廻らされている。したがってこの図様は、正月に出される吉祥ものであることからすると、長頭短身の老人としては描かれていないが、福禄寿なのであろう。

正月の飾りとして、他の「京洛月次風俗図巻」はもちろん、この期の京洛を描いた風俗画にもなかなか見られない珍しい図様であるので、あえてここに紹介した。

おわりに

以上、述べてきた点を勘案すると、少ない事例からの性急な判断は慎むべきであろうが、本図巻やその他の諸本の成立は、なんらかのテキストに依拠して、朝倉重賢によってまず同内容の詞書が書かれ（ただし二系統ある）、それを元にして、幾人かの画家が、それぞれに詞書にあう挿絵を描いた、との制作の筋道が考えられるのではなかろうか。大方のご教示をお願いしたい。

〔注釈〕

（1）箱書きには「十二月巻　二巻」とあるが、「京洛月次風俗図巻」は、売り立て目録に記された名称である。

（2）歳時と関連した絵画史の流れを把握するにあたっては、武田恒夫『日本絵画と歳時―景物画史論―』（ぺりかん社、一九九〇年四月）を参照した。ただし武田氏は、同書のなかにおいては、詞書をもつ月次風俗画の問題については、触れられていない。

（3）例えば我妻直美氏の「研究資料　江戸「月次風俗画」研究」（『國華』一二四三号、一九九九年）に掲載された「江戸「月次風俗図」リスト」には、一九点の作品がリスト化されているが、その内、一〇点が巻子となっている、といった具合である。ただし本リストには詞書の有無についての項目がないので、その点は不明である。

（4）藤井裕之「摂津の四季耕作図―月次絵の継承と展開」（神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』一八号、二〇〇二年三月）、藤井氏のこの見解は武田恒夫『洛中洛外図』（京都国立博物館編、一九六六年）・『日本絵画と歳時』（ぺりかん社、一九九〇年）に依拠している。

（5）ＮＨＫプロモーション発行（一九九三年）掲載、№19図版。個人蔵。

（6）以上、榊原悟「チェスター・ビーティ・ライブラリー収蔵の絵巻・絵本類について」（『秘蔵日本美術大観　五　チェスター・ビーティ・ライブラリー』講談社、一九九三年、および『チェスター・ビーティ・ライブラリー絵巻絵本解題目録　図録篇』勉誠社、二〇〇二年）。「十二月遊び絵巻」は「制作時期も江戸時代前期、十七世紀後半から十八世紀初めの頃と見られる作」としたうえで、「つまりここでは、各月の行事そのものに関心があっても、そうした行事を支える人間や風俗そのものへの興味は急速に後退しているのである。現世への、そして時様風俗への旺盛な関心に支えられたいわゆる近世初期風俗画の歴史が、これら一連の月次風俗図巻の出現で最終段階に達したと見てよいだろう」と述べている。

慶應本は同大学の「奈良絵本データベース」上で閲覧することができる。解説には「一般的には御伽草子に含めないが、絵巻として御伽草子と同じように享受された」とある。国立会図書館本はデジタル化資料で閲覧することができる。大阪青山短期大学本は、『大阪青山短期大学所蔵品目録』第一輯（思文閣出版、平成四〈一九九二〉年十月）№一七一に「月次のことぶき」として掲載。解題によると、本巻物には題簽がなく本題名は箱書きによるとのこと。また同解題にはハイドコレクションとあり、旧蔵者が知られる。目録には一月の詞書と絵が掲載されている。佛教大学本「十二月あそひ」は、同図書館デジタルコレクションで閲覧することができるし、また影印に書誌・翻刻や解説を付して、二〇〇九年、同大学図書館より刊行されている。

（7）チェスター・ビーティ・ライブラリー本については、慶應本と同一であることを、石川氏は「同筆同一作品の絵巻」（『奈良絵本・絵巻の展開』）のなかで報告されている。

（8）朝倉重賢については、石川透『奈良絵本・絵巻の生成』所収「第三編　朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類」（三弥井書店、二〇〇三年）および「同筆同一作品の絵巻」（『奈良絵本・絵巻の展開』所収、三弥井書店、二〇〇九年）

（9）石川透「慶應義塾図書館蔵『十二月』解題・翻刻・挿絵」（『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』二〇号、二〇〇五年）による。

（10）諸本の絵については、今後、美術史家による判断を仰がなければならない。

詞書の翻刻

凡例
①新字体に改めた。
②読点は私に付した。
③ルビは原典に付されていたものである。
④」は一紙の終りを示す。

【上巻】

むかしハ年月のうつる時節をしらす、草のかれ行て二たひあをくさかふるを、是を一年と名つけ、もし人そのとしいくはくそととへは、我はいく草の青くなりしをみたりとこたふ、月のまとかなるを一月となつけ、草の色をそく生たつとき、閏ある事をしれり、そのゝち唐尭といへるみかとの時、容成といふ臣下はしめて暦をつくり、十二月を一年とし、卅日を一月とし、十二時を一日一夜にさためしより、年月あきらかにしれる事になり侍へり、をよそ一年を十二月にわけらるゝ事ハ、天の七曜、地の五行にかたとれり、是にたくへて月々のいはひあそひのしな〳〵、世々のみかとのなし」そめ給ひしかす〳〵おほし、それならて月雪花もみちハこと更うとからぬなかめにして、哥よミ詩つくりて、月はくもらすもかな、雪にハあとつけし花ハちらすも、紅葉ハ色なかハりそとねかふも、又やさし、さらてハみかとのまつりことにかす〳〵さためあり、年中行事・公事根源につまひらかにしるされたり、又年月のうつるに、かはる〳〵のあそひ有事ハ、雲の上大宮人よりしたつかたあやしの民まてこれある事、おほかり、源氏物かたりまほろしの巻、吉田の兼好かつれ〳〵草にかきのせたるらん、それハをろかならん人のよミて、たやすくしるへき事も、ふかき文の言葉なれハ、かたかるへし、たゝ世のこと草、人のしり侍へるをかしき事ともの絵にかきたるを、いさゝかにこと書してわらひ草のたねをうゆるならし、

正月」

去年と今年と一夜をへたてゝ、きのふにけふハかはらすとおもへと、春たつ空ハ、心からのとやかなり、四方の山にハ霞のあし、青山のかしらをふまへて立あかり、うくひすのこゑもうれしけにのきはちかく聞ゆ、日影もうらゝかに、垣ねの草ももえ出るほと也、梅の匂ひもいにしへをおもひ出るよすかとなれる大路のさま、松たてわたし、家々のしめかさりもいミしくうちみえて、内にハほうらいの山をかさり、鶴亀にことふきをなそらへて、千代よろつ世をいはふとかや、さたまれる事とて、おとこ女われも〳〵と出たち、家のかとに物申て礼義たゝしきも又をかし、あかつきよりこゑうちたてゝ、めてたきわかえひすをいはひおさむ、千町万町のとりおひ、さゝらをすりて福徳をいはふ、都かたにハきかす、あつまのかたにハえひすかきといへるものゝ一ちやうの弓をもつて、あ」まつしたのおさまる御代をことふきす、とし玉とかや命をのへてすゑもさかふる、あふきをうるもいかめしうよハゝるこゑきこゆ、子とものむれ出て玉をとはしあそふもさらなり、七草のいはひことすきてハ、十五日よりうちつゝきて、大内より賀茂かすかのとうとおほんのまつりもあり、廿日ハくそくのかゝみひらき、武家のいはひハひたすらけふあるものをや、」

（絵）

二月

すてに睦月もうちすきて、きさらきにうつれは、梅のはなやう〳〵ちりぬるに、をしつゝきてうは桜も咲いてたり、八重の紅梅ハなを色をあらそふやゝ春、ふかくかすみわたりて、人の心もうきたち、山々の木のめ、はる雨にけしきたちて、月のなかはに成行まゝに、十五日ハほとけねはんにいらせたまふ、其ふるきあとをきくに、天ちくのくしな国はつたい

かのほとりしやらさうしゆのもとに、八万の大衆、十六の大らかん、天人龍神五十二るいほしのことくつらなりて、ほとけのねはんをかなしミけん、その有さまを絵にあらハしてねはんさうといふならし、本朝の寺々、此日にいたりて、此絵をかけ、涅槃会おこなふなり、ことさら五山のうち東福寺の絵ハ、ちやうてん」すとかやいへる法師のかきたりけん、人々これにまいりておかみたてまつるもけうとし、」

（絵）

三月

弥生の空にハ咲のこる花もなし、うちつゝく春雨にちりすくる枝々、青葉ましりの花の色、人の心をそまよはしなやますものなる、名ところおほき花のにほひ、吉野初瀬ハさら也、さかのゝ御寺にハ、大念仏とてむかしよりさたまれるおこなひあり、きせんくんしゆしてまうてぬるに、をしつゝきて十九日ハさかのゝ如来の御身をぬぐひ奉る、まことに三国第一の名仏そかし、廿一日ハ高野大師の御影供、かのたか野の御山はほと遠けれハ、申すにたらす、都ちかき東寺のさんけい、仁和寺・高雄のまうてあるもけしからぬ御事也、わらハへのことわさとて、都の町々よりうへつかたまて、庭鳥あはせのなくさミあり、庭とりハ智仁勇の三徳をそなへて、もの、ふのよきならハし也、また」むかしよりいひならハすなる千羽の庭とりをかふときハ、その家かならす長者となるといへり、それならても時をしるの徳あるもの也、」

（絵）

四月

卯月に成ぬれハ、かきねに咲るうの花ハ、又なまめかし、花橘の匂ひをとめて、郭公の雲井に名のるころ、しでのたをさの名に、いにしへ人の恋しきは、けにさら也、きしの山吹きよけに咲く井手の水に顔うつるハ、こかね花さく夕かとおもほゆるも心ゆかし、八日ハ灌仏のおこなひあり、推古天わうの御時よりはしまれり、ほとけのむまれ給ふ日なれハ、生湯をひきたてまつる、わか葉の木すゑ涼しけにしげり行もあハれ也、おほつかなき藤の花さきミたれてさかふる所の藤波も、たかき空にや匂ふらん、都ちかきところにハ、大谷とかや、名をえたる花ふさなかき白藤もありといへと、なをもこゝろゆくハ野田の藤、」ことさら藤ハしゆえんをこのむものなれハ、酒の匂ひにハ花ふさもなかく木もさかふるとなん聞えし」

（絵）

五月

五月のはしめの五日ハ、民の家々あやめふく日にて、夏の疫気をハらふ事あり、今日ハことさら賀茂のくらへ馬、深草の神事にて人ミな袖をつらね、ぞよめき立て行く、ミる事すてにはて、帰るさのほとこそけうとけれ、わらハへとものかりそめに石うちしける、のちにはわかきおのことも、ゐんちといふ事をし出して、たかひにたゝかひいどミて、手からにもあらぬきずをかうふり、命をすつるもをろかならすや、此日、雨のふるも残りおほし、もろこし黄帝の時に、蚩尤といへる朝てきをせめほろほしためしより、今につたハりて、家ごとにのほりをたて、かぶとをかけて天下太平のありさまをしめすを、のぼり なんども」しとゝにぬれて、人もかさうちさして、ゆく〳〵ミるも又をかし、楚の屈平原かことよりはしまりて、けふハ茅巻をいはふとかや、」

（絵）

六月

水無月のころハ、世もことさらにあつうして、人もいきつきあへぬほとなり、家ことにハ、蚊やり火ふすふるもあはれなり、あやしきふせやに白くさける夕かほのはなの、名ハこと〳〵しうけたれて聞ゆるも又をかし、こと更にけんふつすへきハ、祇園まつり也、もとハ是尾州の津嶋の

御神也、清和天皇の御時、貞観十一年、はしめて都にくわんじやうす、それより神事のことおこりて、むかしハ六十六のほこをかさりて、四条の町をわたしけれと、事大さうなれハ、今ハわつかにそのかすをしらしむるハかり也、山をかさりてわたすも又見ところ有、ひとつもあたにいはれなき山ハあらす、此日にいたりて、神の御こしを相わたすに、」犬神人のたち出てまつりの御ともし、ひちをはり威勢をふるふもをかしき、いはれのある事也、」

【下巻】

七月

扨も七月の七日ハ天上にあまの川とてふかくひろき川あり、一とせにたゞこよひはかり牽牛織女のあふ夜なれハ、かさゝきのもみちのはしをわたして、ちきりふかきなりたちをなすとかや、乞巧奠とて人ミなこよひハ七夕まつりすもなまめかし、五色の糸をはりにさし、衣をかしてたなハたつめに事をいのるもさら也、九日・十日、六だうといふ所にまうてゝまつるへきしやうりやうをむかふもけしからす、十四日よりハ寺にせかきのくやうあり、町にハ聖霊のたなをかさり、百味のそなへもの、十六日まていとなむもたうとし、家々のかとにハ、」いろ〳〵のとうろうに火をともし、むかしよりある事にて、わかき人ミなたち出てをとりをするも、たへぬ見物ならすや、たれとハしらすほうかふりして、柳のこしたをやかにうちふり、哥のししししめやまにうたひつれたるハ、夜目にみるからうつつ心になりぬ、」

（絵）

八月

名にあふ秋もなかは、やう〳〵夜さむになるほと、こしちの雁も羽をならへては雲井になきてくるころ、萩か下葉も色つきわた田かりほすなと人の心も秋に成ぬれハ、そのことくなくものあはれにむしのこゑ〳〵もうらミかほなり、三五夜にハこと更、月もひかりをそへ、かつらの実のるゆふへの空、もろこしには洞庭の月の夜をなかめあかして、詩をつくるとかや、わかてうにハさらしなをばすて、二見か浦・清見かせきこそ月に名をえしところなれ、都ちかきあたりにハ、広沢の池のあたりそ月をなかむる名所とハいふなる、それならてハ、すま・あかしの月ハさら也、こよひ一輪まとかにミてり、万水の影てりまされは、二千里の外まて」雲もなし、故人の心はいかにとか思ふらんと、更行空にかたふく月をなかむるほとに、名残なく山のはにかくるゝハ又すてかたし、」

（絵）

九月

野分の風すさましく、すゝきはほに出て、なにのたゝちにたれをかまねくらん、荻の葉かれ行て、蝉のもぬけたる又あはれなり、咲つゝく菊のまかきは、露うるハしくみえわたりて、ひときはのなかめそかし、もろこしの慈童か菊のなかれに、よハひをのへて七百歳をへしかとも、かたちハたゝ十六七なり、彭祖といへる仙人に成けん、それよりこのかた、菊を延年草と名つく、陽九といふは九月九日ハこれ、大陽の日にして、人かならすえやミわつらふ事あれとも、菊のさけをのむときハ、かならすやまひをのかるゝとかや、されはわか朝にハ、賀州に菊酒あり、むかしハ菊の山ありて谷水なかれ出たるを、酒につくりてのミけん」人ミな、一百二百のよハひをたもちてやまひなかりし、そのためしよりいまにつたハる名物也、」

（絵）

十月

神無月といふ事ハ、日本の神たち出雲の国にあつまり給へハ、出雲にハ神有月と申すとかや、かの大社の明神ハ、諸神のつかさにてましませは、この所にもろ〳〵の神たちあつまり給ふ、けにも出雲のうミつらにハ、

さゝ舟いくらといふかすなくうかひて、ミゆといひつたへ侍り、北時雨いくしほそむらん、青かえても色ことに染わたりて、にしきをさかす山々の名ところハおほけれと、ことさらやま〳〵の中にも、龍田の明神ハ紅色をこのミ給へは、もみちの色もことにそめわたり、川にちりしくありさま、蜀江にひたしてすゝくにしきの色も、かくやとそおほゆ、ミやこちかきところにハ、いなり山のもみちも名たりけれと、高雄のもみちハ一きハの詠めそかし、あたりちかき清たきの」川瀬よりちりうきてなかるゝもみちの色を見さらんも、心つきなし、谷ふかきにむかひてかハらけあそひするもさらなり、」

（絵）

十一月

もみちの色もやう〳〵うつろひ行て、霜月のころハ木すゑもあはれなり、霜はしらすさましきにて立ならひて、いとしろうミゆるも又をかし、大うちより民の家々まて庭火をたきて神をいさむる事も故なきにはあらす、むかしあまてる太神御おとゝのそさのおのみことにうらミ給ふ事ありて、あまのいは戸にこもり給ひしに、国のうちとこやミとなれりけり、思兼のみこと、はかり事をめくらして、あまのかこ山のまさかきに、八咫のかゞみをかけ、庭火をたきて八百万の神たち、岩戸のまへにむらかりて、かくらをそうし、まひあそひ給ひしかは、あまてる太神いは戸をひらき出出給ひしかは、人のおもてしろくみえけるより、」あなさやけあなおもしろと諸神申させ給ひしより、庭火ハはしまりて今につたハる事也かし、」

（絵）

十二月

月日やう〳〵すき暮て、極月にうつり行こそ、人の名残も世のいそかハしきもおもひしらるれ、すさましき物ハ、十二月の月夜といひけん、くもりなくさし出たる空のけしき、さすかに見る人もなし、月のすゑにいたりぬれは、心ほそくなり行まゝ、又くる春のいそきにとりかさねて、家々うちハらふすゝほこりのたちまよふて色めもみえぬに、町々ハ行人帰る人これかれめせといふて、門の松ゆづりはかさりのしめほなかの歯朶こゑ〳〵によハるも、いとけうとし、鏡もちいつくとてとよめきにきハふもまたをかし、年月暮て節季候とおとりハねて物をこふところもあり、ことのいそかハしきにとりくハへてうたてしくもおかしかりけり、大つごもりの夜いたうくらきに、たいまつかひともしなど手ことに」もちて、夜半すくるまて人の門たゝき、はしりありきて、あしをそらになし、つもりかさなるあきなひ物のかけをきのり、そのかハりをこふにこと〳〵しくのゝしりて、いさかひあらそひてどよみになるもうとまし、あかつきかたよりハ、さすかに家々もしつまりつゝ、物をともなく成ぬるこそ、年の名残はいま一時よとおもふにも、いとゝ心ほそからぬかは、明行空のけしき、きのふのいそかハしきに引かへて、一きはめつらしき心ちそする、世のけハひも花やかにうれしけなる又あはれ也、いひかはす言葉も、めてたき春のよろつ世をいはふ若水に、屠蘇白散をちりうかしてかすみをくミつゝ年の千とせをいはふとかや、」年ことの日々月々のあそひ物、世の人のなすことわさよむともかくとも、つきすましけれと取分て、此十二月のなりハひ、上つかたより、したつかたまておなしくつとめいとなむ事にて、年月をはをくりむかふる物なり、」

（絵）

（終わり）

［付記］
本稿を成すにあたっては、ＡＲＣからは写真掲載と詞書翻刻の許可をいただいた。
また英文要旨については前崎信也氏にお世話になった。併せて謝意を表する。